

あるべき姿(概ね30年後)

- 一人一人が、生涯にわたって主体的に学び続け、多様な人々と協働して新たな価値を創造する人づくりが実現しています。

目指す姿(5年後)

子供が育つ環境にかかわらず、「遊びは学び」という乳幼児期の教育・保育の基本的な考え方が家庭や幼稚園・保育所・認定こども園等、さらには小学校以降で共通認識され、一人一人の子供が興味・関心に基づいてやりたいことを自由に選択できるような環境の中で、子供たちには、生涯にわたって主体的に学び続けるための基盤が培われています。

各学校段階において、インターネットやデジタル機器・技術に関する知識や利活用する能力等が育成されるなど、日本で最高レベルのデジタルリテラシーを身に付けることのできる教育が実現しています。

不確実な時代を自立して生きていく主権者として、AIに代替されない能力や個性を伸長すること、我が国や地域の経済・社会の発展を支える人材を育成すること、一人一人の多様な学習ニーズに対応した教育機会・アクセスを確保することの3つの視点から高等学校教育改革が進められています。

これまでの「知識ベースの学び」に加え、「コンピテンシーの育成を目指した主体的な学びを促す教育活動」を積極的に推進する「学びの変革」が定着し、全ての子供たちに、これからの社会で活躍するために必要な資質・能力を着実に身に付け、希望する進路を実現しています。

家庭の経済的事情や障害の有無等にかかわらず、子供たち一人一人が生涯にわたって自己の能力と可能性を最大限に高め、多様な個性・能力を更に伸ばし生かしていく教育が実現しています。

県立大学はもとより、県内の大学・短期大学それぞれが持つ強みや特色を生かした教育が行われるとともに、各大学等の連携・協力のもと、これからの社会で求められる普遍的で汎用性の高い知識・スキルを学び、身に付けることができる、魅力ある高等教育環境が構築され、県内外から多様な人々が集まっています。

※1 「感じる・気付く力」、「うごく力」、「考える力」、「やりぬく力」、「人とかかわる力」
※2 令和8年度までは正答率40%未満の児童生徒の割合、令和9年度以降はIRTバンド1・バンド2の児童生徒の割合
※3 IRT(項目反応理論:Item Response Theory)とは、児童生徒が問題に正しく答えられたかどうか、問題の特性(難易度や測定の正確さ)によるのか、それとも児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、それに基づいて児童生徒の学力を数値化(IRTスコア)する統計理論のこと。IRTバンドは、そのIRTスコアを5段階に区切ったもので、IRTバンド3が基準のバンド、IRTバンド1が最も低いバンドを指す。
※4 令和8年度に新たに、県立特別支援学校高等部の卒業生対象に調査を実施(生徒の障害の状態等によっては保護者対象に調査を実施)
※5 令和8年度に新たに、小学校第5学年、中学校第2学年の児童生徒、公立高等学校(広島市を除く)の第1学年及び第2学年の生徒並びに県立特別支援学校で高等学校に準ずる教育課程を履修している第1学年及び第2学年の生徒を対象に調査を実施

用語解説

デジタルリテラシー…デジタル技術に関する基本的な事項や活用に関する知識、理解。
コンピテンシー…単なる知識や技術だけでなく、態度などを含む様々な心理的、社会的なリソース(主体性・積極性・協調性・協働力・回復力等)を活用して、複雑な要求(課題)に対応することができる実践能力や行動特性。
IRTバンド…IRTは、Item Response Theory(項目反応理論)の略。児童生徒が問題に正しく答えられたかどうか、問題の特性(難易度や測定の正確さ)によるのか、それとも児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、それに基づいて児童生徒の学力を数値化(IRTスコア)する統計理論のこと。IRTバンドは、そのIRTスコアを5段階に区切ったもので、IRTバンド3が基準のバンド、IRTバンド1が最も低いバンドを指す。
情報活用能力…コンピュータ、情報通信ネットワーク、AI、メディア等の情報技術の特性を理解し、情報モラルや権利・責任に配慮して適切に取り扱い、その上で情報の収集・整理・比較、発信・伝達などに情報技術を活用する力。

指 標

「遊び 学び 育つひろしまっ子!」 推進プランに掲げる5つの力が 育まれている年長児の割合※1	ビジョン策定時点 (R2)の現状値	現状値	5年後の目標値 (R12)
	73.2% (R1)	82.5% (R6)	▶ 85.0%

目標設定の考え方

子供が育つ環境に関わらず、全ての乳幼児に「遊び 学び 育つひろしまっ子!」推進プランに掲げる5つの力が育まれ、その後の教育の基礎が培われていることが、本県が目指す「生涯にわたって主体的に学び続け、多様な人々と協働して新たな価値を創造することのできる人材」の育成に重要であることから、県全体の85%の乳幼児に、プランに掲げる5つの力が育まれることを目指して設定した。

「主体的な学び」が定着している 児童生徒の割合	ビジョン策定時点 (R2)の現状値	現状値	5年後の目標値 (R12)
	小:71.1% 中:64.6% 高:64.3% (R1)	小:74.5% 中:65.4% 高:68.2% (R6)	▶ 小:80.0% 中:80.0% 高:80.0%

目標設定の考え方

社会で活躍するために必要な資質・能力の育成を図るには、「主体的な学び」が定着している児童生徒が増えることが必要であると考えことから、県全体の8割の児童生徒に「主体的な学び」が定着することを目指して設定した。

全国学力・学習状況調査において 学力に課題のある児童生徒の割合	ビジョン策定時点 (R2)の現状値	現状値	5年後の目標値 (R12)
	—	—※2	▶ 小:25.0% 中:25.0%

目標設定の考え方

全ての児童生徒が社会で活躍するために必要な資質・能力の育成を図るためには、児童生徒一人一人の学びの土台となる「基礎・基本」を徹底し、学力に課題のある児童生徒を減少させる必要があることから、国の全国学力・学習状況調査における新たな調査方法として、IRT※3方式が導入され、IRTバンド1・バンド2の児童生徒の割合について国が想定する現状値が約3割であることを踏まえ、そこから減少させることを目指して設定した。

特別支援学校高等部卒業時に、 自立や社会参加に向けた進路決定が できたと考えている生徒の割合	ビジョン策定時点 (R2)の現状値	現状値	5年後の目標値 (R12)
	—	—※4	▶ 100%

目標設定の考え方

障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加の実現に向け、県立特別支援学校の教育内容の充実を図ることにより、県立特別支援学校高等部を卒業する全ての生徒が、自立や社会参加に向けた進路決定ができたと考えている状態を目指して設定した。

発達段階に応じた情報活用能力を 十分に身に付けている 児童生徒の割合	ビジョン策定時点 (R2)の現状値	現状値	5年後の目標値 (R12)
	—	—※5	▶ 小:60.0% 中:60.0% 高:60.0%

目標設定の考え方

児童生徒がこれからのデジタル社会において活躍するためには、児童生徒が生成AI等の先端技術を含めた情報技術の仕組みや背景を含めた特性の理解と併せて、情報技術の認知や行動に与えるリスクに対応し適切に取り扱い、情報技術を効果的に活用することが必要であることから、類似の調査で発達段階に応じた情報活用能力を十分に身に付けている児童生徒が約4割であることを踏まえて、県全体の6割を目指して設定した。

指 標

県内大学等の定員充足率

目標設定の考え方

県内大学等と連携して、本県の高等教育環境の魅力を高め、広く認知されることにより、県内はもとより、県外からもより多くの高校生等から選ばれている状態として、県内大学等の定員充足率が100%となることを目指して設定した。

ビジョン策定時点
(R2)の現状値

100.9%
(R2)

現状値

91.4%
(R6)

5年後の目標値
(R12)

100%

目指す姿の実現に当たって考慮すべき課題

- 全ての乳幼児に、その発達の特性に応じて、生涯にわたって主体的に学び続けるための基盤となる「5つの力」を育むためには、園・所等の教育・保育の更なる質の向上を図るとともに、園・所等で育まれた「学びの芽」を小学校以降につなげ、学びの連続性を確保する必要があります。また、家庭に対しても「遊びは学び」の理解をより一層広げていく必要があります。
- 将来の予測が困難な時代においては、学校で学んだ知識や技能を定型的に適用して解決できる問題は少なくなり、児童生徒が課題を自ら発見し、協働して新たな価値を生み出せる能力が重要となります。また、生成AIなどデジタル技術の進展により、情報の真偽を吟味する力、複数の情報を結びつけて新たな意味を見いだす力、問題の発見・解決等に向けて情報技術を適切かつ効果的に活用する力などを備えた人材を育成することが求められています。
加えて、少子化・高齢化、生産年齢人口の減少、地方の過疎化が一層深刻化し、産業構造や社会システムの変化を踏まえた労働力需給ギャップや理系人材の不足が生じる可能性が指摘されています。
- 児童生徒一人一人が社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するためには、地域の産業や文化、自然、暮らしと安全を支える仕事等に触れるなど、多様な体験・学びを積み重ね、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育成していく必要があります。
- いじめや暴力行為については、未然防止、早期発見・対応の一層の充実を図るとともに、不登校児童生徒への支援については、個々の状況に応じた支援により、誰もが社会とつながることができ、安心して学べる環境を整える必要があります。また、外国人児童生徒など、多様な個性や特性、背景を有する子供が多くなっていることから、より一層多様性を包摂する学校教育に取り組む必要があります。
- 特別支援学校及び特別支援学級に通う児童生徒数が増加し、教育的ニーズが多様化していることから、特別な支援を必要とする子供たちの自立と社会参加に向けて、障害の状態等に応じた適切な指導や必要な支援、教育環境整備により一層取り組む必要があります。
- 県内大学等の学生が、これからの社会で求められるデジタルリテラシーを、県内のどこの大学等においても学修することができるデジタルリテラシー教育の環境を整備する必要があります。
- 18歳人口の減少等に伴い、入学者選抜における大学間競争は激しさを増していくことが見込まれる中、個々の大学等の取組に加え、県内大学等と連携し、本県の高等教育環境の魅力を高め、県内外の高校生等に広く認知してもらう必要があります。

目指す姿の実現に向けた取組の方向

① 乳幼児教育・保育の充実

乳幼児教育支援センターを拠点として、各種研修の充実や幼児教育アドバイザーによる訪問・助言等により、園・所等における教育・保育内容を充実させることに加え、幼保小連携を前提とした教育活動を推進します。また、保護者に「遊びは学び」の考え方について共感的な理解を図ることなどを通じて、家庭教育を支援します。

② 学びの変革の推進

生成AIなどデジタル技術の急速な進展を踏まえ、情報モラルやメディアリテラシーなどの育成強化を進め、デジタル技術の効果的な活用等を通じた子供たちの主体的な学びを促す教育活動の充実など、「主体的、対話的で深い学び」の実現に向けて取り組めます。また、一人一人に合った教材の提供や子供の関心・特性に応じた多様な学びの提供等を通じた「個別最適な学び」と多様な他者との協働により、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出す「協働的な学び」の一体的な充実を図ります。

加えて、AIなどのデジタル技術を活用して、ものづくり等の地域産業の持続的な成長を牽引する専門人材や、地域の持続的な発展を支える人材など多様な人材を育成するため、県立高等学校の統合と学科改編を組み合わせることなどにより、生徒が授業等において一定の選択幅を持つことができ、集団の中で切磋琢磨しながら多様な体験・学びができる教育環境の整備に取り組めます。

③ キャリア教育の推進

学校教育全体で職場体験活動やインターンシップなどの職業に関する体験活動の充実や学校と地域・社会や産業界等が連携・協働した取組を促進するなど、児童生徒が社会の中での自分の役割や自分らしい生き方を考えるキャリア教育の充実に取り組めます。

④ 特別支援教育の充実

個別の教育支援計画の活用などによる、乳幼児期から学校卒業後までの切れ目ない支援体制を整備するとともに、障害の状態や特性、心身の発達段階、教育的ニーズに応じた専門的な指導や教育環境の充実に取り組めます。

⑤ 誰もが安心して学習できる環境づくりの推進

各学校において、日常的な活動を通じた、児童生徒の成長と発達を支える生徒指導を充実させることで、安心して学習できる環境づくりに取り組めます。また、不登校児童生徒への対応など多様なニーズに応じた教育機会の提供や、経済的支援に加え、外国人児童生徒等に対する学習支援の充実に取り組めます。

⑥ 高等教育の充実

県立大学において、時代の要請に応え、社会で活躍できる人材を継続的に育成するとともに、県内大学等と連携し、デジタルリテラシー教育の推進を通じて、県内高等教育の魅力向上を図ります。また、県内外の高校生等に対して、県内大学等の教育内容や学生生活に関する情報など、幅広い魅力・情報の発信に取り組めます。さらに、社会人の学び直しを促進するため、より一層の教育内容の充実などに取り組めます。

重点項目に関する主な取組

- 児童生徒が、地域の産業や文化、自然等に触れながら、多様な体験・学びを積み重ね、社会の中での自分の役割や自分らしい生き方を考えるキャリア教育の充実に取り組めます。

用語解説

メディアリテラシー…情報メディアを批判的に読み解いて必要な情報を引き出し、その真偽を見抜き、活用する能力。